

# 第3回オリンピック教育フォーラム

日時:2013年7月22日 17:00-19:00  
会場:筑波大学東京キャンパス文京校舎 119  
主催:オリンピック教育プラットフォーム  
筑波大学附属学校オリンピック教育推進専門委員会

## 趣旨

2010年12月の創設以来、オリンピック教育プラットフォーム(CORE)は2度のフォーラムと国際的なシンポジウム・セミナーを開催した。また、筑波大学の特色である11の附属学校と連携したオリンピック教育の研究・実践は、着実に蓄積されてきている。第3回フォーラムでは、附属学校のうち中学校、大塚特別支援学校、視覚特別支援学校の委員から、2012年度の具体的な取り組みが紹介され、今後のオリンピック教育のカリキュラム作りを念頭に置いたディスカッションが行われた。フォーラム当日には、文部科学省や日本障害者スポーツ協会の来賓を含め計31名が出席した。

## プログラム

### 1. 開会挨拶

石隈利紀(筑波大学副学長、附属学校教育局教育長)

### 2. 報告「CORE事業について」

真田 久(筑波大学体育系、CORE事務局長)

### 3. 報告「オリンピック教育への取り組み」

#### ① 教科等での取り組み

長岡 樹(附属中学校)

#### ② 昨年度の年間を通しての全校的な取り組み

根本文雄(附属大塚特別支援学校)

#### ③ パラリンピックから見たオリンピック教育

寺西真人(附属視覚特別支援学校)

### 4. ディスカッション「オリンピック教育とは」

司会:吉澤祥子(オリンピック教育推進専門委員会副委員長)

コメンテーター:甲斐雄一郎(筑波大学人間系、附属学校教育局次長)

### 5. 閉会挨拶

宮崎明世(筑波大学 体育系、CORE事務局)

## 報告「CORE事業について」



真田久(筑波大学体育系、CORE事務局長)

真田氏は、CORE事務局長として、COREの組織概要を説明し、昨年度6月のオリンピック教育フォーラムと12月のオリンピック教育国際シンポジウムの成果を紹介した。また今年度の活動として、以下の内容を提示した。

- (1) 附属学校同士が連携し、小中高と特別支援学校におけるオリンピック教育モデルを開発
- (2) 国内外でのオリンピック教育を推進 (IOCオリンピック研究センターにて広報、オリ・パラリーセミナーなど90大学との連携)
- (3) 各国オリンピック研究・教育センターとの人材交流の推進

## 報告「教科等での取り組み」



長岡 樹(附属中学校)

長岡氏は、中学校保健体育科におけるオリンピック教育について、学習指導要領の中での位置づけや具体的な単元計画、授業実践の観点から報告した。

特に授業実践に関しては、生徒の興味に基づいてテーマを選択し、ロンドン五輪の動画や、ヒュスプレクス(古代オリンピックのスタート装置)などの体験的な教材を用いた授業など、多様な展開を報告した。

また、その取り組みは体育理論の授業に収まることなく、学芸発表会や運動会、総合的な学習の時間に波及していることが紹介された。

#### 報告「昨年度の年間を通しての全校的な取り組み」



根本文雄(附属大塚特別支援学校)

根本氏は、大塚特別支援学校の高等部で展開されている、知的障害児におけるオリンピック教育の実践について紹介した。

平成24年度の9月から-11月に展開された「オリンピックの感動を伝えよう！」という単元において、国内外のメダリストに手紙やビデオレターを送り、班別学習において壁新聞や聖火リレーの再現、アスリートに関する調べ学習などの多様な試みが行われた。特に、ウサイン・ボルトへのビデオレターをジャマイカ大使館に提出し、生徒はそこで同国の食文化や自然を学び、レゲエの音楽にのったダンスを体験したことが報告された。

オリンピックは知的障害のある生徒にとって興味を持ちやすく、実際に見る・聞く・感じる・考えるという主体的な経験をする教材として有効である。そして、知的障害児におけるオリンピック教育は各々の生活の豊かさにつながり、ひいてはそれが自尊感情を高めるキャリア教育としての意義を持ち得るとまとめた。

#### 報告「パラリンピックから見たオリンピック教育」



寺西真人(附属視覚特別支援学校)

寺西氏は、総合的な授業における取り組みについて報告するとともに、視覚特別支援学校におけるオリンピック教育の課題に言及した。

授業では、パラリンピックに向けた様々な「挑戦」について取りあげたが、スポーツに関心の薄い生徒が多いこと、また視覚障害のある生徒を引率する際の制約が多いことを示した。様々な障害を一緒にとらえるのではなく、それぞれの障害に応じたプログラムの展開が必要であり、パラリンピック日本代表コーチを経験した立場から、競技という厳しい環境下で、指導者と選手がいかに「挑戦し続けることができるか」を突き詰めていくことが、オリンピック教育のモデルにつながるのではないかと提案した。

#### ディスカッション「オリンピック教育とは」

司会を吉澤祥子氏(オリンピック教育推進専門委員会副委員長)、報告を行った3名の附属学校教諭をパネラーに、またコメンテーターとして甲斐雄一郎氏(筑波大学人間系、附属学校教育局次長)を迎えて、今後のオリンピック教育の展開とカリキュラム作りをテーマとしたディスカッションを実施した。

議論では、まず大塚特別支援学校における先進的な実践に至った背景について質問が出された。根本氏は、校内マラソン等の学校事業でスポーツに触れ、またロンドンオリンピック・パラリンピックの直後という時期も幸いして生徒が興味関心を高めていたことを紹介した。

次に、中学校におけるパラリンピックの扱いに関する質問には、長岡氏が学芸発表会で生徒が作成した「オリンピック新聞」におけるパラリンピックの記事を挙げ、教員側が材料を提示すればさらに深く学習することも可能であると答えた。また、キャリア教育との関連については、オリンピック教育を通してスポーツへの多様な関わり方を知り、例えば古代オリンピックを調べる考古学者を目指す生徒が出てくるかもしれない、とその可能性を示した。



ディスカッションの様子①

そして、司会の吉沢氏が、今回の主題であるオリンピック教育のカリキュラム作りに関する問いを発すると、各教諭は以下の通り意見を発表した。

寺西氏(視覚特別支援学校):カリキュラム作成に向けては、障害を持った生徒でも「工夫すればもつとできるんじゃない?」と呼びかけるような、自立した行動を呼び起こす視点を盛り込むべきである。

根本氏(大塚特別支援学校):カリキュラム作りをする上では、生徒の主体性をどこまで引き出すことができるかを念頭に置きたい。調べ学習をする際にも、生徒の興味に応じて有名でないアスリートについて取り上げ、また得られた結果に対してどう思うかを考えさせることができるような工夫が必要だろう。

長岡氏(中学校):学習指導要領にオリンピックに関する内容が明記されていることから、体育理論の中でそれを取扱うのは難しくない。しかし、オリンピックには多くのテーマが考えられるため、その選別が必要である。そこでは、生徒の興味を考慮した上で、学校での普通の生活につながるような題材を採用することが重要である。



ディスカッションの様子②

これに関して、筑波大学附属高校の中塚氏が、各学校の状況や抱える課題の違いに触れた上で、全体として体系的なカリキュラムを提供するための方策として、オリンピックバリュー:Excellence、Respect、Friendshipの三点を柱にして取り組むことを提案し、ディスカッションは締めくくられた。文部科学省からは、日本のオリンピック教育の事例を国際的に発信して欲しいとのエールが寄せられた。

#### コメンテーター甲斐氏のお話



甲斐雄一郎氏(筑波大学人間系、附属学校教育局長)

甲斐氏は国語教育を専門とする立場から、オリンピック教育にかかわって嘉納治五郎と国語科の成立との関連にかかわるエピソードを紹介した。

明治27(1894)年、東京高等師範学校の校長であった嘉納は国語教育への提言を行ったという。それは中等教育については教育内容上の重点の古典から現代文への移行、初等教育については厳格な作法に基づく手紙文の排除であった。甲斐氏はそれを今日まで続く国語科の成立に直接関連した提言であるとともに、柔道の精神としての「精

力善用」「自他共栄」と共通する理念の所産であることを指摘した。

これからの学校教育におけるオリンピック教育のあり方について、甲斐氏は二つの観点から検討することの可能性を述べた。一つは本日の報告の中心をなした、オリンピックを媒介とした教科等内部の充実に向かう内容であり、もう一つは教育内容の再構築を促すような、教科横断的なものである。

甲斐氏は後者の例として、オリンピックの種目がかならずしも固定的ではなくいくつかの条件で選択された所産であるという事実に基づき、その選択の過程と論理を学ぶことは、体育科においては選択された種目はもとより弓道や剣道など、選択されていない種目の意味への再考を促すとともに、体育科以外においてもオリンピックの名を冠した教科別イベントや PISA など国家横断的な学力調査等を対象として、それぞれの教科内容を学習者自身が意味づけ学ぶ意味を再認識する契機となる可能性があるとした。

あわせて各学校種の学習指導要領の総則にうたわれた言語活動、問題解決的な学習、見通しと振り返りなどの学習活動を具体化する手がかりがオリンピック教育には豊富に見出せると指摘し、その一つの問題の起点として、オリンピック復活の行事は数多く実施されていたにもかかわらず、なぜクーベルタンのみが「近代オリンピックの父」と呼ばれるのか、というものを挙げ、それについて検討することが、学習者自身のうちに理想をはぐくみ実現にいたる道筋を構想する見通しのみならず、変化を受け入れつつその持続を可能にする方法まで視野に収めることの重要性を習得する機会となりうることを示唆した。